様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２０３２

研究課題名（和文）中国科学思想の構造的把握

研究課題名（英文）Study On the Underlying Structure of Scientific Thoght in China

研究代表者
武田　時昌（TAKEDA, TOKIMASA）

京都大学・人文科学研究所・教授

研究者番号：５０１７９６４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：中国における科学思想の理論構造と史的展開を総合的に研究するためのフレームワークとして、思想、宗教と科学、占術の複合領域に考察のメスを入れ、自然探求の学問が生み出した立論や自然哲学的言説を考察し、科学思想が発揮される場とその全体像を明確にした。そして、中心的論題である天文律暦学関係と医薬学・養生思想関連との2分野に理論的解析を試み、その理論基盤となった易や老子の自然哲学との関連性を明らかにすることで、そこに発揮された数理、哲理に構造的把握を行った。

研究成果の概要（英文）：　Natural science in East Asia formed a unique field of study called the study of shushu, which consisted of various fields of natural science and divinations derived from the Yijing. As the study of shushu is a field peculiar to East Asia and forms the essence of the scientific culture of East Asia, it seems indispensable to grasp its structure and historical development.In order to create a comprehensive framework for examining the scientific thought in China, I tried to analyse the complex area of the study of shushu.
Since ancient times, the Chinese have had a highly developed natural philosophy which grasps the laws of the relation between natural phenomena and all living things on earth, and tries to find out what society should be and how human beings should live on the analogy of it. I grasped their mathematical-philosophical theories structurally, and revealed the basis of scientific thought.

研究分野：中国思想史

キーワード：中国科学　術数学　科学思想史　自然哲学　陰陽五行説　中国思想史

１．研究開始当初の背景

(1) 中国では古代より自然現象、動植物の生態などを観察し、規則性や相互関係を定式的に把握して人間社会に応用しようとする自然探究の学問を大いに発達させてきた。その試みにおいて、天文暦学、音律学、鍼灸医学、本草学といった中国特有のサイエンスが興起するとともに、天人感応、物類相感に依拠する自然哲学的な言説が多彩に生み出された。そして、国家や社会における諸々の制度・習俗の形成、文化活動の遂行に大きな指針を提供してきた。そこで発揮されている哲理は、中国の学術文化の基層構造を特色づけるものであり、思想史、科学史両域にわたる考究対象である。従来の研究では、漢代の災異思想、宋明理学のなかの「気」の哲学といった形で個別的な検討がなされているが、学問的基盤や理論的特色を構造的把握するには「科学思想」として包括的に考察する必要があるように思われる。

(２) 欧米における科学思想の理論構造や史的展開、または科学基礎論（科学哲学）に関する研究は、数多くの専著がある。近年には国家や社会と科学技術、科学知識が国家や社会と相互にどのような関係にあるかを探る科学社会学も盛んになってきた。それに比べて中国における科学思想の研究は、きわめて数少ない状況にある。これまでにおいて山田慶兒、坂出祥伸両氏に先駆的な研究があり、また漢代の天文律暦学に関する専著には堀池信夫氏の『漢魏思想史研究』（明治書院、1988）、川原秀城氏の『中国の科学思想：両漢天学考』（創文社、1996）、医薬学の分野では石田秀実氏の『中国医学思想史』（東京大学出版会、1992）などがあり、いずれも興味深い議論がなされている。それらによれば、天文律暦学、道教の身体技法、内経医学、養生思想といったもののなかに、ユニークな科学的アイデアが唱えられていたことがわかる。しかしながら、思想的、社会的基盤を明確にして全体像を描き出すという総合的な見地からの研究というわけではない。

(３) 研究推進者である武田は、中国科学思想史研究を究極の目的として自然科学の諸分野や象数易、緯書、中国占術など術数学全域に個別的な考察を試みながら、京大人文研科学史研究室の共同研究プロジェクトとして 2004 年度より 2 つの術数学研究班「陰陽五行のサイエンス」（2004-2009）「術数学—中国の科学と占術」（2010-2014）を組織し、2015 年 3 月に終了させた。本研究は、これまでの研究資源、研究者ネットワークを基盤として中国科学思想史の総合的な研究に着手したものである。

２．研究の目的

中国の伝統科学は、欧米の場合とは異なり、科学研究の場が世俗にあり、国家官僚に抜擢された一部のエリートを除いて先駆的な業績を残した人物は隠者的な存在であり、史書に記録がほとんどなく、無名のままに埋没している。したがって、自然探求を推進した研究者集団がどこでどのように活躍したかを窺うことのできる手がかりはほとんどない。そのために、従来の科学史、技術史研究は、伝存する典籍のなかから高度な理論が展開された著作を選び出し、先駆的業績を時系列で並べることで、近代科学の系譜としての発見史、発明史を素描してきた。しかし、伝統科学の本質を明確にするためには、科学思想史的アプローチによって思想や学術の形成や発展にどのような作用を発揮したのかを検討しなければならない。

中国における自然探究の学問を振り返ると、今日ほどに社会的ステータスが高くなく技芸のレベルであり、天文占、易占、風水などの占術やまじない、不死願望による長生術、仙薬、存思、内丹の宗教的修養法などの術数的（＝擬似科学的）な要素と複雑に絡み合っていた。つまり、自然科学の諸分野は、易を中心とする占術と複合した中国に特有の学問分野＝術数学を形成し、発展してきた。従来の科学史、思想史の研究は、天文占、易占や六壬、遁甲、九宮等の諸技法、医療の仙薬、呪いなどは卑近な占術、呪術として排斥し、考察の埒外に置いてきた。しかしながら、科学と占術、呪術が雑居状態にある術数学の世界に、科学的思考を発揮する場があり、術数学という学問的な枠組みにおいて科学思想の史的展開を考究する必要がある。

そこで、中国における科学思想の総合的研究を行うフレームワークとして、思想、宗教と科学、占術が交叉する複合領域＝術数学に本格的な考察のメスを入れ、自然探求の学問が生み出した立論や自然哲学的言説を考察し、科学思想が発揮される場とその全体像を明確にする。そして、自然認識や数理思考の本質的特色を探り、未開拓である中国科学思想史研究の突破口を切り開く。

３．研究の方法

本研究が考察しようとする事項は、以下の３点である。

⑴ 科学思想の学問的基盤
⑵ 現象把握のメカニズムと数理構造
⑶ 科学思想の発揮の場と科学知識の定着

それぞれについて、以下のような見地において多角的な考察を試みる。

⑴ 科学思想の論理基盤

中国における科学思想の理論的特質や史的展開を総合的に研究しようとするならば、その理論的基盤を明確にしておく必要がある。科学思想の理論的根幹に据えられたのは、老子と易の自然哲学である。これまでの研究においては、儒家や道家・道教それぞれの聖経としての役割を中心として、政治思想、宗教思想のメインテーマとして個別的な考察

が行われてきた。ところが、易、老子という書物に論述された始原的な哲理がそのままの形で敷衍されて自然哲学的な言説が構築されたわけではなく、経文とは別の次元での新たな「解釈」がなされている。したがって、科学思想史的アプローチから老子や易の役割を考察するには、その主要な注釈書を参照しながら経文分析してもその核心に迫ることはできない。

老子や易は、かつては成立に疑義があったが、郭店楚簡や馬王堆帛書の出土によって黎明期の自然学の形成においても中心的な役割を担ってことが判明した。そこでの中心的な論題は、生成論、宇宙論に関わる興味深いものであり、陰陽説、五行説の初源的な言説になっている。

また、漢代に武帝による儒教の官学化政策によって儒家は道家から首座を奪い、先秦諸子百家の思想地図は大きく変動し、五経の注釈学を中心とする学問体系が構築され、放逐された道家思想は民間に下り、やがて道教という宗教思想に変容する。その流れにおいて、易が台頭し、象数易という独自の数理思想が唱えられる。自然哲学の理論的枠組みを考えると、易の数理は老子を基盤として唱えられた哲理と交錯し、老子から易へとすり替えられる。その具体的様相を探れば、中国的自然哲学の理論基盤が明確になるにちがいない。そのことについても、馬王堆漢墓などから出土した簡帛資料に注目すべき言説が見られ、『淮南子』『韓詩外伝』『説苑』などに関連する論説が存在する。

そこで、新出土資料を手がかりとし、漢代の文献と比較することで、自然哲学の理論的基盤がどのように形成されたかを考察する。

⑵ 現象把握のメカニズムと数理

自然現象の把握方式、物類の関係性の説明原理には、陰陽五行説が活用されたが、漢代に流行した災異説が政治思想に活用された側面はよく研究されているが、天人感応のメカニズムをどのように説明し、自然探究の学問や技芸にどのような思考ベクトル、認識パターンを提供したかについて、総合的な研究はなされていない。

その研究の突破口として注目されるのは、多種多様に著された占術書及び医薬書に展開されている論説である。代表的な理論書は、王充『論衡』や『黄帝内経』であり、これには数多くの研究があるが、漢代の特異空間に著された両書は中国書のなかで最も難解な著作である。その複雑な理論構造に頭を悩ませるよりは、占術書（易占、天文占、風水、六壬等）や医薬類（針灸術、本草学、養生術）に着眼すべきである。とりわけ、占術書では『開元占経』『五行大義』、医薬書では『医心方』といった百科全書的な著作があり、散佚書を含む唐代までの主要な著作の所説が類別的に集録されている。また、近年に出土した日書と呼ばれる一群の占術書には多種の技法が掲載されている。それらに掲載する占術理論や陰陽五行説に遡及的な考察を試み、易や老子の数理的影響を探ることで、天地自然と人倫社会に横たわる関連性に着眼した科学思想の理論枠組みを明確にする。

⑶ 科学思想の発揮の場と科学知識の定着

科学思想が最も発揮された分野は、天文律暦学と医薬学・養生思想である。前者は易理と関連づけられ占術書に大きな影響を与えており、後者は老子の「生」の哲学及び弟子の彭祖の長生術に由来する。両者はいずれも世俗に向かうベクトルがあり、科学知識として社会に広く浸透し、人々の社会生活に深く根ざした。それらの科学知識は年中行事や習俗に理論的基盤を提供しており、自然、生命、健康をめぐる人々の理念や信仰を形成してきた。また、暦文化において占術は人々の行動指針となり、導引行気や瞑想を用いた健康法、修養法の身体技法は近世社会に大いに流行した。

科学知識が人々にどのように啓蒙され、活用されたかを考察するには、著名な科学書よりも通俗的な啓蒙書または日用類書や筆記類が有益である。また、近代以降にサブカルチャーとして定着し、今日まで受け継がれているものが数多くある。とりわけ、日本には江戸後期から昭和にいたるまで各地の知識人によって多数の書物が著され、今日まで伝存する。その論説を遡及的に考察すれば、東アジア世界に伝播し、受け継がれた伝統科学知識の具体的様相を探ることができるにちがいない。

４．研究成果

中国における科学思想について多角的な考察を試み、その形成過程の具体的様相を探りながら理論的な基盤を明らかにした。科学思想が発揮された言説の理論解析を試み、自然探究の学問である術数学に多角的な考察に行った結果、天文律暦学と革命イデオロギー、医薬学と道教文化の接触境界領域に科学思想の発揮の場を見出すことができた。そこで、それらの数理や自然哲学に構造的把握を試み、思想的、社会的背景を考察した。主要な研究成果は、以下の７項目に大別できる。

⑴ 科学思想の論理基盤の形成

先秦の自然哲学において、新出土資料である郭店楚簡の『太一生水』『五行』『六徳』などを検討し、先秦において老子の生成論がどのように敷衍されたのかを探り、そこに多元的な陰陽二元論、思孟学派の五徳説が展開されていることを指摘し、やがて陰陽五行説へとまとめられていく過程を追跡した。そして、老子や易の自然哲学との関連性を明確にしながら、存在論、自然観、世界観といった科学思想の基本概念がどのように形成されたかを明らかにした。

2016 年度には、国際連携と研究者ネット

ワークの構築を目的として、中国、韓国の科学史、思想史研究者を招聘し、術数学という視座からの科学思想史の必要性を提言した。9 月 3 日には、四川大学古籍整理研究所副所長の尹波氏、同副研究員の白井順氏を招聘し、中国近世学術文化国際ワークショップを開催し、11 月 13 日には朝鮮大学校教授の任正ヒョク氏と協力して宋相庸、申東源両氏をはじめとする韓国科学史研究者との国際ワークショップを主催した。

⑵ 古代占術の技法と数理

占いを断片的に寄せ集めた「日書」と総称される一群の出土資料（九店楚簡、放馬灘秦簡、雲夢秦簡、孔坡家漢簡など）の読解を通じて、古代占術における諸技法を考察した。そして、陰陽五行、十干十二支、五音十二律、二十八宿などの配当説について、漢代以降に定着した陰陽五行説との比較を行い、初源的な数理を遡及的に明らかにし、中世以降の暦注に記載される事項（十二直（建徐）、二十八宿、往亡、血忌など）との連続性を検討した。

なお、日書や占術関連書の考察においては、山梨県立大学准教授の名和敏光氏、早稲田大学院生の小倉聖氏とともに読解ワークショップを開催した。そこでの研究活動の一環として、2015 年 12 月 12 日には名和氏が会長を務める中国出土資料学会の平成 27 年度第 2 回例会において、復旦大学出土文献与古文字研究中心の廣瀬薫雄、程少軒両氏を招聘し、小倉氏の研究発表を含む講演会を企画した（司会＆コメンテーターを担当）。

⑶ 天人感応のメカニズムとその数理

自然界に生起する諸現象、物類の生態や相互関係を定式的に把握し、そこから類推して人倫社会のあり方を考究する理論的な基盤である天人感応説（天人合一説、天人相関説）について、『呂氏春秋』『淮南子』『春秋繁露』を中心に分析し、その数理構造の特色を類別的に明らかにし、漢代の思想的変革に果たした役割を考察した。また、物類相感現象の把握方式において、「言は意を尽くさず」とする中国的不可知論をどのように克服し、物理、薬理の探究がどのようになされたのかを考察した。

2015 年 12 月 19 日に形の文化会（代表：山口義久大阪府立大学名誉教授）との共催で術数学合同研究会（総合テーマ「無と有を繋ぐ世界」）を開催し、研究発表を行った。

⑷ 天文律暦学と暦運思想

馬王堆出土の『五星占』を手がかりに顓頊暦を復元的に考察し、『淮南子』天文訓、『史記』天官書、『漢書』律暦志などの立論との比較を行い、惑星運動論が顓頊暦から太初暦、三統暦、四分暦へと発展していく過程を明らかにした。そして、漢代に流行した暦運思想の数理構造を解析し、それが顓頊暦を土台にして構築されたことを明らかにし、さらに中世、近世に唱えられた暦運説の変容を窺った。また、『開元占経』『天地瑞祥志』及び『大唐陰陽書』に展開された天文占、暦術の理論的な分析を試み、出土簡帛を含む古代文献に遡及的な考察を行うことで、天文律暦学が依拠する自然現象の把握方式を明らかにした。

天文暦学研究において国内外の研究者と連携を深めることを目的として、人文研白眉准教授の Bill MAK 氏と協力して京都大学宇宙ユニット、白眉センターとの共催イベントを企画し、2015 年 6 月 17 日-19 日にアジア伝統科学国際ワークショップ 2015（総合テーマ「古今の宇宙観」）、2017 年 10 月 25-28 日にアジア伝統科学国際会議 2017（総合テーマ「天と地の科学—東と西の出会い」）の大規模な国際研究集会を主催した。

⑸ 養生思想と治身の自然学

中国で古代より大いに流行した長生術、養生術について、老子の「生」の哲学の系譜を辿り、馬王堆、張家山出土の養生書、『抱朴子』から近世の養生書に至るまで科学思想史的な見地から通時代的な考察を試みた。そして、中国的健康思想の源流を探り、治身から治国へという政治思想との関連性を明らかにし、万能薬に着眼して科学研究の場と道教文化の関連性を探った。

その研究成果として、四川大学で行われた国際会議（代表：姜生教授）、内蒙古自治区呼和浩特での中華医学学会医史年会で招待講演したほか、湯島聖堂の神農祭記念講演会、日本化学史学会年会、醫聖堂例大祭記念講演会、東方学会学術大会にて講演を行った。また、2016 年 1 月 9 日に北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部、学校法人兵庫医科大学中医薬孔子学院と共催で伝統医療文化国際ワークショップ（総合テーマ「鍼灸道　未来への軌跡」、2016 年 3 月 5 日-6 日に国文学研究資料館主導国文研主導共同研究プロジェクト（代表：陳捷教授）との共催で「東アジアの技術的伝統への再照射」国際ワークショップ等を開催した。

⑹ 科学思想史から見た東アジア伝統医薬学の特質

東アジア世界の伝統医薬学に対して、医学思想史的アプローチにおいて多角的な考察を行った。今日にも問題になっている不妊治療やアンチエイジングに関してどのように取り組んできたか、伝統医療文化の特質とは何か、医学知識として社会にどのように定着したのか、といった本質的な問いに対して、科学思想史的な見地から考察を試みた。

その考察結果は論文にまとめ、京都医学史研究会の「恵迪」、漢方鍼医会の「漢方鍼医」といった機関誌や「医道の日本」の連載コラムに掲載した。また、全日本鍼灸学会、北里大学東洋医学総合研究所、三考塾のセミナーや新潟大学エコヘルス講習会などにおいて、

臨床の現場で働く医療関係者に向けて講演を行い、伝統医学の文化的多様性や現代的意義、可能性を大いにアピールした。

(7) 中国科学思想史基礎資料データベース
考察対象に取り上げ、読解を試みた文献については、諸本を校合して電子テキスト化し、訳注の情報を内包させた汎用データベースを作成した。京都大学所蔵の古医書関連の漢籍については、2016 年度より森ノ宮医療大学教授の長野仁氏とともに附属図書館と連携してデジタル化事業を推進し（附属図書館ＨＰにて公開中）、目録の改訂版の作成に取り組んだ。
また、2017 年 12 月に山東大学国際漢学センターの中心メンバーを招聘し（鄭傑文、劉心明、陳肖杉、西山尚志の 4 氏）、山梨県立大学准教授の名和敏光氏にも協力を仰いで中国から流出した域外漢籍の目録データベースの作成と出版に関する諸問題を協議した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 33 件）

(1) 武田時昌、何が東洋医学を進歩させてきたのか、医道の日本、査読無、894、2018、174-175
(2) 武田時昌、ヒトと国家の健康寿命、医道の日本、査読無、893、2018、142-143
(3) 武田時昌、六神丸と近代日本、医道の日本、査読無、891、2017、152-153
(4) 武田時昌、スポーツ医学のコンタクトゾーン、医道の日本、査読無、890、2017、166-167
(5) 武田時昌、老官山医簡と漆人形の衝撃証言、医道の日本、査読無、889、2017、172-173
(6) 武田時昌、腹の虫から結核菌へ—伝屍の古病理学、医道の日本、査読無、887、2017、142-143
(7) 武田時昌、運気論で四元素説を批判する—陰陽五行説入門（3）、医道の日本、査読無、886、2017、152-153
(8) TAKEDA Tokimasa、The Six Incurables and Four Difficulties: An Examination of the Paradigms of Chinese Medicine from the Perspective of Shu-shu Studies. ACTA ASIATICA、査読無、113、2017、69-92
(9) 武田時昌、運気論はなぜ流行ったのか —陰陽五行説入門（2）、医道の日本、査読無し、885、2017、166-167
(10) 武田時昌、思孟学派の「五行」説—陰陽五行説入門（1）、医道の日本、査読無、884、2017、166-167
(11) 武田時昌、富士川文庫と藤浪鑑の夢体験—近代京都の医史学(2)、医道の日本、査読無、883、2017、148-149
(12) 武田時昌、竹岡友仙の医事活動—近代京都の医史学(1)、医道の日本、査読無、882、2017、176-177
(13) 武田時昌、生気と天医—『医心方』巻二、八卦法の数理的考察、啓迪、査読無、31、2017、18-34
(14) 武田時昌、五行六気の数理と医術—四時循環のサイエンス— 、漢方鍼医、査読無、39、2017、6-19
(15) 武田時昌、生気と天医—『医心方』の方位学、医道の日本、査読無、878、2016、168-168
(16) 武田時昌、モンゴル伝統医療の特異点、医道の日本、査読無し、877、2016、182-183
(17) 武田時昌、『七十一番職人歌合』に描かれた医師、日本の医道、査読無、876、2016、150-151
(18) 武田時昌、噂の女医のカルテ—談允賢『女医雑言』を読む、医道の日本、査読無、875、2016、166-167
(19) 武田時昌、鍼灸を存続させた明治の先覚者、医道の日本、査読無、874、2016、150-151
(20) 武田時昌、長寿遺伝子とミトコンドリア—アンチエイジング療法、医道の日本、査読無、873、2016、173-174
(21) 武田時昌、長生の煉丹術、化学史研究、査読無、43－2、2016、99-100
(22) 武田時昌、三焦弁証と舌診—温病学の問題圏(2)、医道の日本、査読無、872、2016、172-173
(23) 武田時昌、アンチ傷寒論者の挑戦—温病学の問題圏(1)、医道の日本、査読無、871、2016、168-169
(24) 武田時昌、医道は一人一流派—江戸儒医折衷派試論、医道の日本、査読無、870、2016、150-151
(25) 武田時昌、東アジアの万能薬、斯文、査読無、128、2016、41-67
(26) 武田時昌、漢方には雑草がない—青蒿研究の栄冠に思う、医道の日本、査読無、869、2016、172-173
(27) 武田時昌、歌訣と図説—脈診のベクトル（2）、医道の日本、査読無、867、2015、184-185
(28) 武田時昌、涪翁から郭玉へ—脈診のベクトル（1）、医道の日本、査読無、866、2015、154-155
(29) 武田時昌、巫鬼から医薬へ—宋代の淫祀禁絶と医学教育、医道の日本、査読無、864、2015、158-159
(30) 武田時昌、長寿者の食卓—クコ茶の遡及的考察、医道の日本、査読無、863、2015、172-173
(31) 武田時昌、子育ての脳科学—産育習俗文化論(2)、医道の日本、査読無、862、2015、184-185
(32) 武田時昌、産屋の情景—産育習俗文化論(1)、医道の日本、査読無、861、2015、166-167
(33) 武田時昌、医心方を世界記憶遺産に！、医道の日本、査読無、860、2015、168-168

〔学会発表〕（計 19 件）
(1) 武田時昌、現代に漢方の知恵を活かす—日中の伝統医学の比較を通して、招待講演、平成 29 年度日本東洋医学会千葉県部会、2018/01/30
(2) 武田時昌、中国古代の暦運思想、研究発表、歴博国際シンポジウム「年号と東アジアの思想と文化」、2017/10/22
(3) 武田時昌、漢方医学の本質とは何か～技術的伝統の遡及的考察、招待講演、東洋医学研究財団創立 40 周年記念「東洋医学に関する市民公開講座」、2017/10/21 日本語
(4) 武田時昌、復古と革新のあいだ—近代京都の医史学、一般講演、京都アスニーゴールデン・エイジ・アカデミー「道の歩み、ワザの伝統」、2017/06/30
(5) 武田時昌、蘭医と儒医の科学啓蒙、招待講演、漢蘭折衷に関する総合的研究シンポジウム、2017/03/10
(6) 武田時昌、元気の出る医学～東洋的エコヘルス試論、招待講演、新潟大学保健管理センターSD 企画特別講演会、2016/12/09
(7) 武田時昌、日本近世科学文化と朝鮮、研究発表、日韓国際ワークショップ「朝鮮科学史研究の現状と課題」、2016/11/13/
(8) 武田時昌、治身の自然学—中国的長生思考、招待講演、東方学会平成 28 年度秋季学術大会、2016/11/03
(9) 武田時昌、医道の京風景－復古と革新のあいだ、招待講演、醫聖堂例大祭記念講演会、2016/10/10
(10) 武田時昌、五行六気の数理と医術—四時循環のサイエンス、招待講演、漢方鍼医会 10 月例会外来講演会、2016/10/09
(11) 武田時昌、東亜伝統医薬研究新視角、招待講演、中華医学学会医史年会第 14 届学術年会、2016/08/19
(12) 武田時昌、復古と革新—医道の超変革、招待講演、北里大学東洋医学総合研究所第 11 回鍼灸学校教員のための古典講座、2016/08/07
(13) 武田時昌、長生の煉丹術、招待講演、2016 年度化学史研究発表会（年会）、2016/07/10
(14) 武田時昌、思想史から見た漢方復興運動—鍼灸超変革私論、招待講演、（公社）全日本鍼灸学会関東支部認定講習会、2016/05/29
(15) 武田時昌 婦人病の科学思想史的考察、招待講演、三考塾講演会、2016/05/15
(16) 武田時昌、言は意を尽くさず—中国的不可知論、研究発表、形の文化会第 63 回フォーラム＆術数学合同研究会、2015/12/19
(17) 武田時昌、中国伝統科技文化新探、招待講演、四川大学文化科技協同創新研発中心・文化魅力系列講座、2015/12/06
(18) 武田時昌、科学探索群体与道教文化、招待講演、基調報告、第 5 回中国道教科学技術史国際学術研討会、2015/12/05
(19) 武田時昌、東アジアの万能薬、招待講演、第 51 回神農祭記念講演会、2015/11/23

〔図書〕（計１件）
池田知久・水口拓壽編、武田時昌・池田知久・李零・工藤元男・平澤歩・武田時昌・川原秀城・水口拓寿・近藤浩之による共著　中國傳統社會における術數と思想　汲古書院 2016/12

〔産業財産権〕
なし

〔その他〕
中国科学思想史基礎資料データベース：京都大学人文科学研究所武田研究室 HP
http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~takeda/

６．研究組織
(1)研究代表者
武田　時昌（TAKEDA TOKIMASA）
京都大学・人文科学研究所・教授
研究者番号：５０１７９６４４

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
なし